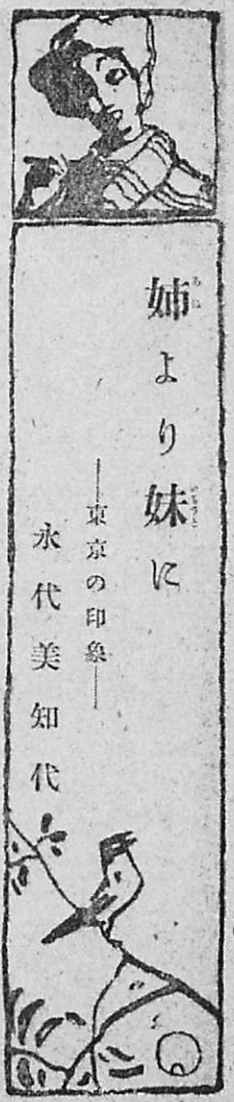

姉より妹に

——東京の印象——

永代美知代

下枝さん。

あなたに別れて、もう三日、何だか千年も萬年も逢はないでゐるやうに思はれますが、私が旅路に起臥したのは、やつと二晩にしかなりません、朝眼がさめても、傍にゐる筈のあなたが見えないで、どんなに淋しいか。

母様はお達者ですか、名古屋まで私を送つて下さつた父様はもうとつくに御歸りのことゝおもひます。あなたは定めし毎日に此姉をなつかしんでゐて下さるのでせう、學校の往きかへりにも、今迄とは違つて、あの淋しい田舍道を、たつた一人で行くあなたを見るやうな氣がします。相變らず霜融道が大變でせう、どんなにお天氣の好い朝でも、必ず足駄をお穿きなさい、忘れても低下駄でお出掛けなさんなよ。

東京驛から、尋ねあてに差あげたハガキには、何を書いたのか、無事着京の御通知だけだつたやうに思ひます。委しいことを認め度いと思つても、何だか唯もう氣持ちがわわなゝしくつて、あの時私は殆んど夢中でしたの、廣い、ながいプラットホームを人波に押されながら、何處を如何出て好いものかも知らず、人眞似に皆様の後ろについて行きますと、開札口に嬉しや私を呼んでる方がある、見るとね、それは誌友の秋元千香子さんよ、お互に手紙のやりとりだけで交際つて、去年の夏寫眞のとりかはせをしたばかり、まだ一度もお目にかゝつたことはないのだのに、どうしてあゝも眼早く私をめつけて下すつたのか、私の方では手を執つて握手をされるまで、まだそれと氣がつかず、黒地に赤で大きく麻の葉を出した友禪秋夫の綿入に、同じ羽織を召して、わざと袴無しの派手なやうな、じみなやうな、何とも云へないキリッとしたおみなりの房々とつやゝかな多い毛を中央から割つて、雜誌の口繪などに見る女優巻きとか云ふのゝよく似合つて美しいお顔をうつとり見入つたまゝ、アッケラカンとしてゐたものですのその時の私の落ぱんやりした、狐につまゝれたもののやうな容子を、今思ひ出しても冷汗が出る。

下枝さん、田舍者は駄目ですわ、東京の方のよく氣がついて、萬事に行き屆くことゝ云つたらありませんの。千香子さんはね、私が田舍をたつ前に、いよ〳〵明日の何時名古屋發の汽車に乗り込みますとだけ、手紙でおしらせしたそれだけで勿體ない、わざ〳〵お出迎へ下すつたのですつて、お蔭で此田舍娘が鎌ひ兒にもならず、怖ろしい惡漢の誘惑にもかゝらず チャンと着京の時刻を確めて、

濟みました。

下枝さん、思へば私は無鐵砲なことをしたものです。女學校の三年級にも入らうと云ふ年頃にもなつて、ことには××女學校長への紹介狀も持參の事故若い女の一人旅を危險とも何とも考へないでゐましたが、流石に東京は日本一の大都會です、萬事が田舍と違つて、田舍者の想像することも出來ない、いろんな惡者共が澤山居て私達のやうな土地不案内な少女と見ると、巧みに誘惑の網を張つてかどあかすのださうです。千香子さんの御兩親は、私が唯つた一人で、保護者なしに、しかも產れて初めての上京とお聞きになつて、ひどく御心配下さいましたよしそれで千香子さんを出迎へによこして下すつたのださうやす。

世間には唯東京にさへ出て來れば勉强が出來るつもりで、入學すべき學校も定めず、誰一人賴る人もなくて、いきなり上京して、女の身で下宿屋等へ入る人もあるさうで、そんな人の多くは不良少年その他の誘惑にかゝり、途には拔きさしのならぬ不幸な身の上になつてしまひます。幸と私は××校長への紹介狀を持つて、その寄宿舍に入れて貰ふ手順になつてゐましたので、千香子さんも幾らか御安心のやうに見受けました。

ですが兎に角旅の疲れもあり、一應自分の家へ落ちつくやうにと、強てのおすゝめではあり、見も知らぬ田舍娘の私を、それ程までに御心配して下すつたと云ふ千香子さんの御兩親へ、御目にかゝつて御禮も申上げ度く、あつかましいやうだけれど、私は千香子さんのお言葉にあまへて、車で本郷西片町の秋元家へ連れられました。

物靜かな邸町の千香子さんの御家へついたのは、彼是灯ともし頃でした。門の中へ車を引き込むと、玄關に皆樣出迎へてゐて下さいました。その中には金緣眼鏡の、でつぷりと肥つた千香子さんのお父樣もいらつしつた。上品な丸髷姿のお母樣もいらつしやいました。娘のやうにいたはつて下すつて、何彼とお世話を下さるのでした。

それに初めて知つたのですが、下枝さん、千香子さんのお父樣は博士なの、かなり長い間お手紙をやりとりしてゐるうち、千香子さんが些少ともそれらしい事を仰有らないので、私は今の今まで氣がつきませんでした、世間で名高い、あの秋元博士が、千香子さんのお父樣ですの。

私が頻りと恐縮して勿體ながつてゐるとね、千香子さんは笑つておしまひなさるの、そして「東京では博士はザラにありますわ、御覽なさい、私共のお隣りも、その父お隣りもお向ふも、筋向ふでも、皆な博士だわ」と仰有る。

初めのうち戲笑だと思つてましたが、うそぢやありませんの、本郷の博士町と云つて、西片町は殆んど家並さうだと聞いては、大抵な田舍者は呆れないでゐられません。

一寸とお父樣が碁をお打ちになるにも善昌寺の方丈か、それでなければ隣村の西田の小父樣をお招きなさらねばならぬ無智な人の多い田舍に比べて、下枝さんあなたは何と思ひます。東京の秀れた智識階級の、この博士町を思つて、ぞく〳〵するやうな氣持ちにおなりでせう。私は今、自分自身がその博士町の、秋元博士のお家に居ると云ふだけで、何とも云へず、身内が

引きしまつたやうに感じます。

いつかあなたと、初めての名古屋見物に、お父様に連れられて行つた時、私達はその賑やかさ、廣さに驚きました。併し〳〵東京はそれ處ぢやありません。ですが私はその賑やかさ、廣さに呆れて、イルミネーションの灯の美しさや、電車の道の十文字にしかれた樣など、さうした事を說かうとするのぢやない、たゞ何とはなし東京に戀ひあこがれないではゐられません。

『おゝ東京よ、』あなた程偉大なものが此日本にまたと二つありませうか！世に秀れた博士達を幾人となく住はせて居りながら、素知らん樣で澄し返つてゐる。

下枝さん、

今日からは私もその偉大な東京に住ふ一員よ。昨日までの私ぢやない——私は何だか大事なものを背負はされて歩いてゐるやうな氣持ちです、怖いやうな、それでゐて何處か嬉しさがこみあげて堪らない。

ですがね下枝さん、私は又それと同時に、云はうやうもない心細さを感じないではゐられません。私のやうな田舍娘が、果してよく此大都會のあらゆる人達の中に立ち交つて行けるか如何か、私は東のお屋敷に奈内されて、先づ其華やかさに驚きました。お寒いからとてしつらへられた行火の蒲團のメリンス友禪の柄合の美しさ、お茶だ、何だと、萬事に一分のすきも見出されぬ小間使ひの方にさへ、私は一々オド〳〵と氣がひけるやうなおもひです。

下枝さん、

大都會の中に飛び出した此姉の小さゝを憐れんで下さい。そして祝福して下さい、私ははるかあなたを思ひ、母樣を思ひ、父樣をおもひ、さま〳〵の思ひにかき亂れて居ります。

明日は例の寄宿舍へ入る筈、すぐそちらへ手紙を書いて頂戴。

月　日　　姉より

下枝樣